

---

---

研究ノート

---

---

## 地域史創造と日本兵語り

—タイ北西部におけるタイ日友好記念館を事例として—

岩井華代\*

### Constructing Local Histories and Narratives about Japanese Soldiers: The Thai-Japan Friendship Memorial Hall in Northwestern Thailand

IWAI Hanayo\*

This study explores local histories in Thailand, often viewed as subordinate to the national narrative. It focuses on a community museum in northwestern Thailand, along a retreat route used by Japanese soldiers during World War II. The museum's creation was influenced by domestic factors, such as the rise of community museums, as well as foreign ones, including Japanese post-war memorial activities. Initially centered on artifacts left by Japanese soldiers, the exhibitions evolved to highlight local histories and cultures, reflecting growing local identity. By tracing this transformation, the study reveals how narratives about Japanese soldiers were woven into local historical consciousness. Ultimately, it proposes an alternative model of local history rooted in the distinct experiences of border regions that are neither compliant with nor overtly resistant to national ideology.

#### 1. はじめに

本稿は、タイ国史<sup>1)</sup>・タイ国民文化の多様性の一形態として扱われてきた地域史・地域文化の位置づけへの問題意識を出発点としたうえで、コミュニティミュージアムに着目することで、国家イデオロギーに統合されない地域史のあり方を検討するものである。具体的には、タイ北西部メーホンソーン県クンユーム郡を調査地とし、第二次世界大戦時、当該地域に一時滞在した日本兵に関する語りが、地域史の一部として取り入れられていく過程を明らかにする。

---

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科, Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

2025年1月17日受付, 2025年5月8日受理

1) 現在の国名であるタイに変更されたのは、1939年である。本稿では、1939年以前の文脈では「シャム」を、それ以降は「タイ」を用いる。また、「タイ国史」という用語は、シャムの時代を含め、タイの公式な歴史を指すものとする。

タイにおける地域史・地域文化は、往々にしてタイ国家イデオロギーに回収されてきた。シャムにおいて急激に地方への関心が高まったのは、19 世紀半ば以降のことである。近隣諸国が英仏に植民地化されていくなか、シャムもまた存立の危機に直面していた。英仏との国境画定の交渉過程で、従来の朝貢国への宗主権を相次いで放棄することになったのである [トンチャイ 2003]。そのような状況下において、チャックリー改革と呼ばれる一連の国家機構改革が行なわれた。その際に導入されたのが、テーサーピバーン体制である。具体的には地方行政領域の再編が行なわれ、それまで各地方国<sup>2)</sup>に委ねられていた地方行政は、中央集権的な領域国家の統治下に置かれることとなった [田辺 1972b]。

20 世紀前半には、タイ国史・タイ国民文化が創造された。歴史学では、「歴史学の父」とも呼ばれるダムロン親王が 1924 年にチュラロンコン大学で行なった連続講演をきっかけに、タイ国史を首都の移動に基づいて単線的に区分する「公定史観」が生まれた。<sup>3)</sup> 具体的には、タイ国史をスコタイ以前、スコタイ時代、アユタヤ時代、トンブリ時代、ラタナコーシン時代に区分するものである [石井 1999: 2-4]。また、タイ国民文化に関しては、1939 年から 1942 年にかけて、ピブーン<sup>4)</sup> がラッタニヨムと呼ばれる文化政策を行なった。これは、文明人として身につけるべきタイ国民文化を成文化したものである [e.g. 玉田 1996; 村嶋 2002]。その結果、多元的に存在していた地域文化や民俗文化は、国家が定義した国民文化を頂点とするヒエラルキーの下に、従属させられることになったのである [Reynolds 2002: 9]。

しかし、1970 年代半ばの民主化運動の興隆のなかで、従来の単線的な歴史学のあり方に疑問が付され、1980 年代には地方史に関心を集めるようになった。ただし、それは地方の王朝史にとどまり、国史の一部として語られるものであった [Thongchai 1995]。また同じ頃、村落コミュニティの文化の保存を推進するコミュニティ文化論という思想 [Chatthip 1991] が登場する。主に「タイ系諸民族」コミュニティを想定していたこの議論は、1990 年代になると、非タイ系諸民族をも包摂するようになる。しかし、タイにおける地域文化が多元的な性格を帯びることに成功したかというところではない。標準化され、脱政治化された文化のみが認められ [Hayami 2006: 291]、それらは結局「タイらしさ」の表れとして扱われているにすぎないのである [Connors 2006: 544]。<sup>5)</sup>

2) テーサーピバーン体制以前のタイの国家領域は、幾内外の地方国と、その外縁の朝貢国により構成されていた [田辺 1972a; Tej 1977]。

3) 1926 年には、ダムロン親王の構想により、シャムの考古遺物と美術品に重点を置いたバンコク博物館が開館した [日向 2012]。その後、他地域においても国立博物館の設置が進められた。また、国立博物館を紹介する芸術局の刊行物において、国立博物館の役割は、地域住民が国家遺産を確認し、国家に対するプライドをもつよう動機づけることとされている [Charoenpot 2008: 3]。

4) ピブーンは、1932 年に起こった立憲革命の主要人物のひとりである。立憲革命とは、文民官僚や軍人からなる人民党によるクーデターが、絶対王政を打倒した歴史的事件である。ピブーンはその後 1938 年に首相に就任し、政権は 1944 年まで続いた。

5) 事例としては、須永 [2017] や平井 [2007] 等を参照されたい。

タイにおける地域史の位置づけを再検討する本稿では、コミュニティミュージアムに着目する。なぜならコミュニティミュージアムは、1980年代にタイ国内における地域史・地域文化への関心が高まる中で誕生した施設だからである。ここは地域史・地域文化を展示する場であるとともに、それらのアイデンティティを再定義する場でもある〔平井 2013: 301〕。<sup>6)</sup>

具体的には、メーホンソーン県クンユーム郡に存在する「タイ日友好記念館」に着目する。なぜなら本館が、地域史・地域文化への関心が高まった結果生じた、コミュニティミュージアム建設の流行と同時期に建てられた施設だからである。また、本館は第二次世界大戦時における、地域住民と異国人である日本兵との関わりを、主なテーマとしている点が特異である。先取りするが、その背景には戦後の日本人による慰霊活動が関わっている。このことから、本館にはタイ国家イデオロギーとは別文脈で地域史を検討する余地があるといえる。

本稿の構成は次のとおりである。まず第2節では、ミュージアムの主要テーマに強く起因した出来事である第二次世界大戦時の状況を踏まえたうえで、現在の展示内容を概観する。第3節では、ミュージアム設立および主要テーマ定着の時代背景を明らかにする。第4節では、ミュージアム設立以降の展開も含めて、展示内容の変遷の全体像を明らかにする。そうすることで、当該地域における地域史創造の一端を明らかにする。

## 2. タイービルマ<sup>7)</sup> 国境地域と第二次世界大戦

### 2.1 第二次世界大戦時の日タイ政治史

まず、第二次世界大戦時の日タイ政治史を概観する。

1939年9月、ヨーロッパで第二次世界大戦が勃発すると、タイはただちに中立を宣言した。翌年6月12日には、英仏と不可侵条約、日本と友好親善条約を結んだ〔吉川 1992: 172〕。しかし、1941年12月8日未明、日本軍は英領マラヤおよびビルマ侵攻のため、タイ国内通過を求めてタイに上陸した。その際、各上陸地点でタイ側との衝突が発生した。その後、タイは日本軍の要求を受諾し、日本軍とタイ国軍は停戦した〔市川 1987: 14〕。その結果、タイは1941年12月21日に日本・タイ同盟条約、翌年1月3日に秘密協定である日泰協同作戦二関スル協定を結び、1月25日には英米に宣戦布告をした〔吉川 1992: 173–174〕。

しかし、日本軍は早くも1942年半ばから守勢に転じていった。インド洋における制空権および制海権を十分に確保できなかったため、タイ西方のビルマ戦線では陸上補給路が必要とさ

6) 現在、約1,300のコミュニティミュージアムが存在している。これは、タイ国内の約1,600あるミュージアムのうち、44の国立博物館と250の政府機関運営の博物館を抜いた数である。運営主体は、寺院（421館）、学校（318館）、自治体（149館）、コミュニティ（110館）等多様である。シリントーン人類学センターのミュージアムデータベース〈<https://db.sac.or.th/museum/>〉（2025/6/25 最終閲覧）による。

7) 1989年に対外的な国号がビルマからミャンマーに変更された。本稿では、1989年以前の文脈では「ビルマ」を、それ以降は「ミャンマー」を用いる。

れた。したがって日本軍は、タイ中部のノーンプラードックとビルマ南東部のタンビュザヤを結ぶ、全長 415 km に及ぶ泰緬鉄道の建設を計画した。1942 年 7 月に着工し、翌年 10 月に完成したこの鉄道は、連合軍捕虜および東南アジアのロームシャの酷使で悪名高く、「死の鉄路」として知られている [浅井 1953: 13; 永瀬 1983: 69-70]。一方タイ国内外では、タイ国民による抗日感情が高まっていた。抗日地下工作のための情報組織である「自由タイ」が、アメリカ、イギリス、タイ国内等において活動していたのである [市川 1987]。

1945 年 8 月 15 日、ついに日本は無条件降伏をした。その翌日の 8 月 16 日に、摂政プリディは緊急国会へ国王の名の下に平和宣言を提出した。宣言の内容は、1942 年 1 月の対米英宣戦布告はタイ国民の意志に反したものであり、またプリディ摂政の署名がないので、これを無効とみなす、というものであった。加えて、日本軍の進駐・占領下にタイへの併合が認められた国境部の領土の返還や、日・タイ両国間のすべての協定の廃棄を約束した [市川 1987: 160]。

一方の在タイ日本兵たちは、タイ国各地の部隊司令部に集められ、英印軍により拘留所に収容された [市川 1987: 179]。その後 1946 年 5 月から 8 月の間にタイの地を引き揚げていった [厚生省 1997: 36]。

## 2.2 タイ北西部の特異性

次に、分析対象のミュージアムが存在する、タイ北西部の戦時の状況について考察する。特徴として、①大規模な戦闘や空襲がなかったこと、②日本軍に対する否定的な感情を促す要因がなかったこと、③主にビルマからの日本軍の撤退路となったことが挙げられる。

まず 1 つ目について、そもそもタイは開戦時の日本軍との衝突を除けば、戦場とはならなかったといえる [柿崎 2022: 535]。しかし戦時中、主に国内の主要都市において、日本軍の駐屯地や、発電所や鉄道駅、鉄道橋などの日本軍が利用している施設が空襲を受けた [吉川 1992: 178]。メーホンソーン県内でも、チェンマイ～タウングー間を結ぶ道路建設のために日本軍が駐屯していた。しかし、この道路建設はなかなか作業が進まず、ビルマへの進軍には使用されなかったという [柿崎 2022: 50; 山口 2016: 115]。よって、それらの日本軍の駐屯地が空襲を受けたかどうかは定かでないが、日本軍の重要拠点として爆撃の標的になったとは考えにくい。

特徴の 2 つ目は、日本軍に対する否定的な感情を促す要因がなかったことである。<sup>8)</sup> 国内では抗日運動である自由タイ運動が行なわれており、各地に地方組織が存在した。しかし、ゲリラ軍（不正規軍）が存在した可能性はあるものの、メーホンソーン県に正規組織は存在しなかった [市川 1987: 120; 柿崎 2022: 524]。したがって、抗日運動のハブが存在しなかったという事実自体が、当該地域において抗日感情が相対的に希薄であったことを傍証している。

---

8) タイ人を雇用して行っていた先述の道路建設の労働環境については、今後検討の余地がある。

特徴の3つ目は、主に日本軍のビルマからの撤退路となったことである。この特徴について理解するためには、当時の戦況について説明する必要がある。1942年1月よりビルマに侵攻した日本軍は、同年5月にはビルマのほぼ全域を占領した。しかし、その後断続的な連合軍の反撃を受け、ビルマの防衛に苦戦することとなる。日本軍は戦況を打破するため、1944年3月にインパール作戦を決行した。これは、連合軍反攻の策源地であったインド東部インパールへ侵攻することを目的とした作戦である。しかし、戦略ミスや、不十分な補給、相手側の新戦術、雨期の到来により、日本軍は壊滅状態に陥った。その後、同年7月に作戦の中止が言い渡され、日本軍はタイ側への撤退を余儀なくされた〔全ビルマ戦友団体連絡協議会 1980: 17-25; 読売新聞社 1980〕。

ビルマからタイへの撤退路は大きく分けて2つある。ひとつは、下ビルマから泰緬鉄道経由でのタイ入国ルートである。そしてもうひとつが、上ビルマからタイ北西部を経由してチェンマイに至るルートである。

この後者のルート上で、泰緬国境の山地を抜けてタイ国に入ったところにあるのが、本稿の調査地であるクンユアムである。そこからチェンマイまで、①北回りのメーホンソーン～パーイ経由、②ドーイインタノンの麓を通るメーナーチョーン（チェンマイ県メーチェム郡）経由、③南回りのメーサリアン経由の3つのルートに分岐した。とくに、先述したチェンマイ～タウングー間を結ぶ道路（メーホンソーン～パーイ経由）は主な撤退路と化し、そこで多くの日本兵が行き倒れた〔全ビルマ戦友団体連絡協議会 1980: 420-423〕。<sup>9)</sup> この撤退路は、白骨街道と呼ばれた。

戦時のタイ北西部の以上のような特徴から、地域住民は、戦場で経験するような、いわゆる「悲惨な戦争経験」をすることなく、むしろビルマ戦線で敗北し命からがら撤退してきた日本兵の姿を目撃したのである。

### 2.3 タイ日友好記念館

本稿の調査地であるメーホンソーン県クンユアム郡は、白骨街道の1通過地点であるとともに、先述したとおり撤退ルートの分岐点であったために、戦時中多くの日本兵が滞在した。戦後50年が経った1996年、この地に新たにミュージアムが誕生した。ミュージアムの沿革は第4節に譲り、本節では現在の展示内容を概観する。現在ミュージアムは「タイ日友好記念館」と呼ばれている。便宜上、ビデオルーム、第1展示室、第2展示室、と名付けて説明する。

#### (1) ビデオルームと第1展示室

チケット購入後すぐに案内されるのは右手のビデオルームである。ビデオでははじめに、クンユアム郡の歴史や多様な民族構成について説明される。その後話は第二次世界大戦へと移

9) 多少距離が長くても患者中継所が多く急峻な山道が少ないといわれたルートとして、主に患者が誘導されたために、本ルート上の死者数は必然的に多くなった〔全ビルマ戦友団体連絡協議会 1980: 422〕。

る。史実のほかに、日本兵が親切であったことや、現地女性と日本兵との恋物語<sup>10)</sup>についても取り上げられる。最後には、戦争は悲惨な記憶を残したが、この地において2つの民族の間で友情が芽生えたことも忘れてはならない、という日タイ友好のメッセージで締められる。

10 分間のビデオを観終えた後に、左手の展示空間へと案内される。まずは、クンユアムの位置情報、民族構成、町の成り立ちについての展示エリアがある。メーホンソーン県クンユアム郡は、南北をメーホンソーン県内のメーラーノイ郡とムアン・メーホンソーン郡、東をチェンマイ県と接し、西はミャンマー国境となっている。また、クンユアムに居住する民族として、タイヤイ（シャン）、カレン、コンムアン、<sup>11)</sup> モン、ラワが紹介されている。元々カレンやラワが住んでいたが、現在のコミュニティの大部分を構成しているのは、19 世紀半ばにサルウィン川流域から移住してきたタイヤイやカレンである。その後 1867 年に、タイヤイのチャンカレーという人物が散らばって居住していた村人たちをまとめて村を作ったのが、町の始まりであるという。<sup>12)</sup>

その後次の空間に移動すると、1975 年にプーミボン国王とシリキット王妃がここクンユアムを訪れたという内容のパネルがある。続いて、地域史についての説明が始まる。概略史では、「1867 年 町の創設期」、「1874 ～ 1929 年 チーク材産業の黄金期およびクンユアム郡の設置」、「1941 ～ 1945 年 日本軍の駐屯」、「1947 年 ～ 現代」となっている。戦時の日本軍の駐屯は、町の雰囲気や社会状況に急激な変化をもたらしたとあり、地域住民は、商売や物資輸送、道路建設等の経済活動を通して日本兵と関わった。また、日本軍の駐屯地や利用した場所も列挙されている。

第二次世界大戦史についての説明の後、日本兵の遺留品の展示へと移る。日本兵の遺留品には、鉄帽、軍服、コート、靴、工具箱、飯盒、水筒、認識票、「お守り」、数珠、経巻、各占領地域の軍票、銃剣、弾丸、手榴弾等がある。ほかに、道路建設に関する言及もある。道路建設は、タイ政府が郡長等を通してメーホンソーン県および周辺地域から地域住民を動員し、その後日本軍が彼らを雇用して進められたものだった。また、「悲劇」と題されたパネルには、ビ

---

10) 現地女性の名はケーオ、日本兵の名はフクダという。フクダは、おそらくビルマに物資を運ぶ輸送部隊の工兵だった。終戦後日本兵は順々にチェンマイに移送されることが決定したが、その直前に脱走しケーオの家に逃げ込んだ。2 人は結婚して子どもを 2 人授かったが、その後フクダはタイの警察に捕まり、病のためバンコクの病院で亡くなったとされている [将口 2008; Niti 2018]。第二次世界大戦下のバンコクにおける、タイ人女性アンスマリと日本兵コボリとの悲恋の物語を描いた『メナムの残照』[トムヤンティ 1987] と似通う点があるため、現地では「クンユアムのアンスマリとコボリ」と呼ばれている。

11) 北タイの主要タイ系諸民族であり、メーホンソーン県ではその多くが移住者である。

12) 実際は複数の説がある。ひとつは、キャラバンとともにやってきたタイヤイ商人たちが、ビルマのシャン州とタイ北西部との交易ネットワークを確立するために町をつくったというものである。2 つ目は、チークが豊富にあった時代、チーク材伐採に従事していた人びとがシャン州から移住してきて、その後定住するに至ったというものである。3 つ目は、シャン州での戦争や盗賊から逃れるために移住してきたというものだ [Niti 2018: 151-152]。クンユアム郡役所および自治体より提供された資料を合わせて参照している。

ルマから撤退してきた日本兵の姿を見て同情したという地域住民の言葉が記されている。

展示の終盤では、「日本兵の食糧事情」「戦争と友情」「戦争の影の中での愛」といったテーマのパネル展示がある。日本軍の駐屯により経済は向上し、地域住民と日本兵との関係も良好だった。また、撤退してきた日本兵に対して地域住民は思いやりをもって可能な限りの支援を行ない、このような友情関係は数々の愛の伝説を生み出したと記されている。

## (2) 第2展示室

第1展示室は、奥に進むにつれて緩やかな上り坂のスロープになっているため、最終的に地上から2階の高さに到達する。階下へ続く階段を降りると、第2展示室がある。

クンユームは、かつてはビルマのシャン州との国境交易の要衝であった。冒頭の展示には、過去の交易や地元の市場についての説明および、商売道具や賑わう市場の様子を表現したジオラマ等がある。その後、タイヤイの文化紹介へと移る。年間行事や音楽、芸術、刺青文化、食文化、家屋の形態、文字等のテーマがある。パネル展示が中心であり、展示物としては、土器や窯、食品サンプル、家屋の建築模型、タイヤイ文字で書かれた書物等がある。終盤では、クンユームの町を建設したチャンカレーや、クンユーム出身の僧侶や職人、町の寺院の紹介がされている。出口には、タイ語、英語、日本語、タイヤイ語で別れの挨拶が書かれたパネルがある。

以上が現在のタイ日友好記念館の大まかな展示内容である。着目すべき点は2つある。ひとつは、地域住民と日本兵との関係についてである。両者の関係は、経済活動を介したものとどまらず、友好関係や恋物語があったことが繰り返し語られている。その理由のひとつとして、前節で検討した戦時のタイ北西部の特徴が起因していると考えられる。

2点目は、館の名称と館内の展示内容の齟齬についてである。ビデオルームおよび第1展示室の内容はいずれも、戦時の地域住民と日本兵との関係が扱われ、また館名にもあるとおり「タイ日友好」のメッセージが強調されている。しかし、第2展示室は地域の生活文化に関する展示内容のみとなっており、前者の内容とは全く異なる。この点について、第4節で再度検討することとする。

## 3. ミュージアム設立の時代背景

### 3.1 コミュニティミュージアム建設の流行

本節ではミュージアム誕生の時代背景について検討する。考察すべきひとつ目の点は、1990年代にタイ国内で流行したコミュニティミュージアム建設についてである。1996年開館の本館も、その例に漏れない。本節では、このコミュニティミュージアム建設流行までの過程を、タイ国内の政治状況および、地域史・地域文化への関心度に着目しながら明らかにする。

タイ国内における地域史・地域文化への関心の高まりを考えるうえで、そのターニングポイ

ントとなった出来事を、1973 年の学生デモをきっかけとした民主化に求めることができる [Thongchai 1995]。このデモは、1958 年成立のサリット政権とそれに続くタノーム政権の、開発独裁政権に対する批判が顕在化したものである [柿崎 2016: 215–219]。この出来事は政治的であると同時に文化的・知的革命でもあり、1970 年代後半以降、歴史学およびマルクス主義経済学（タイでは政治経済学と呼ばれる）の分野から、従来のタイ歴史学への批判が相次いでなされるようになった [Thongchai 1995]。従来とは異なる多中心的もしくは非中心的、非単線的な歴史構築の検討は、新たに地域史への関心を促し、1980 年代に最高潮に達した。ただし、地域史・地域文化は、あくまでタイ国史・国民文化の一部として位置づけられたにすぎなかった [Thongchai 1995: 110, 113–116]。

同じ 1980 年代に現れた思想として、コミュニティ文化論というものがある。これは、国家による集権的、市場志向的な農業・農村開発に対して批判的な立場をとるものである [北原 1996: 72]。具体的には、コミュニティ文化、つまり村民文化や村民の協同的關係性および自主性を重視することで、資本主義の村落コミュニティへの浸食に対抗しようとするものである [Chatthip 1991]。1980 年代はタイ国内の経済状況が大きく好転した時期であった一方で、環境破壊や伝統的社会規範の衰退等の新たな問題も浮上していたのである。この思想は、1980 年代半ば以降、多様な解釈が誕生し、社会運動家、研究者・知識人、官僚等の広範な語り手と聞き手を獲得していくことになる [重富 2009: 31, 39]。

以上のような地域史・地域文化への関心の高まりは、1980 年代後半以降のコミュニティミュージアムの誕生を促したものと考えられる。これらは、政府の方針に従って設立されたものではなく、村落や地方自治体が自主的に設置したものであった [平井 2013: 285–286]。

しかし、その後 1990 年代後半から 2000 年代にかけて急増したコミュニティミュージアムの建設は、また新たな時代情勢を反映したものであったといえる。

1990 年代後半以降、国の制度や政策において、コミュニティの役割や権利が強調されるようになった。たとえば 1997 年憲法（第 46 条）では、伝統的なコミュニティが、自らの慣習や知識、芸術、文化を保存し、復興する権利を有することが明記された [松行ほか 2005]。このような法制度への反映は、コミュニティミュージアムの建設をさらに促進したと考えられる。

またこの時期、中産階級は資本主義や選挙を通じた民主主義のあり方に批判的になり、保守イデオロギーに基づく過去の時代へのノスタルジアは強まった。コミュニティ文化はタイの「美しき過去」を体現するものとして、さまざまな文化的な活動の中で強調された [Saichol 2023: 62–64; Thongchai 1995: 117]。そのひとつが、コミュニティミュージアムであった。

一方クンユアムでは、1980 年代半ば以降の経済成長によって、企業の営業担当者や行商人、観光客等の外部者がより多く訪れるようになった [Niti 2000: 374]。その背景として特筆すべ

きは、道路整備である。メーホンソーン県内の道路整備は、1960年代以降段階的に進められ、1990年代初頭にはチェンマイとメーホンソーン県内各地を結ぶひとつの大きな環状ルートが完成した。<sup>13)</sup> さらに1987年には、第6次国家経済社会開発（1987-1991）の実施とともに、タイ政府は正式にメーホンソーン県に対する観光促進を開始した [Duangjai 2009: 155]。このような観光を促進する動きは、地域住民が自らの文化に注目するきっかけとなった [平井 2013: 295]。

クンユームにおける来訪者の増加は、地域住民の生活を一変させた。クンユームに居住する多様な民族がそれぞれ使用していた言語は後退していき、代わりに中部タイ語が商取引の場を中心に浸透していった。また、外部のものであった中部タイの料理が食されるようになり、服装も低価格の西洋スタイルのものが取り入れられるようになった [Niti 2000]。このような固有の言語や文化の衰退を懸念する声は、年配者の間で少なからず聞かれた [Niti 2000: 384]。

つまり、メーホンソーン県内の観光推進の動きに加えて、この時期のクンユームは、失われつつある地域文化を保存し後世に残すという機能をもった、コミュニティミュージアムが建設されるのに十分な状況であったといえることができる。したがって、1996年にこの地に誕生したミュージアムは、以上のような地域史・地域文化への関心の高まりやコミュニティ文化論の誕生といった国内現象のひとつの事例といえる。

### 3.2 日本人による慰霊活動

#### (1) 日本政府による海外遺骨収集および慰霊事業

考察すべきもうひとつの観点は、日本人による慰霊活動である。戦後日本における海外戦没者に対する慰霊活動は、まず政府による遺骨収集事業に始まり、その後慰霊碑建立や慰霊巡拝へと展開していった。

第二次世界大戦における日本人戦没者約310万人のうち、日本本土以外の各戦域（硫黄島、沖縄を含む）における戦没者は、約240万人であった [厚生省 1997: 118]。戦後、これら海外戦没者の遺骨の半数以上は、旧諸戦域に残されたままとなっていた [木村 2000: 16]。日本政府による遺骨収集事業は、1952年度から1958年度、1967年度から1972年度、1973年度から1975年度の合計3回にわたって行なわれた [厚生省 1997: 119, 223, 337]。第3次計画終了後も補完しつつ続けられることとなり [厚生省 1997: 356]、これまでに約128万柱が日本に送還されている。<sup>14)</sup>

第3次計画終了後の遺骨収集地には、タイが加わった。タイは戦場とはならなかったため

13) 具体的には、1960年代にチェンマイ～メーサリアン～クンユーム間の道路が、1980年代にチェンマイ～パーイ～ムアン・メーホンソーンを結ぶ道路整備が完了した。そして、その間のクンユーム～ムアン・メーホンソーンを繋ぐ道路整備は、1992～1993年に行なわれた [Niti 2000: 381; Duangjai 2009: 155]。

14) 厚生労働省ホームページ「戦没者慰霊事業の実施（式典、遺骨収集等）」（<https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hokabunya/senbotsusha/seido01/index.html>）（2025/1/16 最終閲覧）による。

に、政府主導の遺骨収集事業では優先度が低く、それまで対象地とはなっていないのであ  
る。タイにおける戦没者について厚生省は、ビルマ戦線による多数の傷病兵が、国境を越えて  
メーホンソーン、パーイ、ドーンケーオ（チェンマイ県メーリム郡）等を経由してチェンマイ  
にある病院に向かい、その途中において死没したもの、としている [厚生省 1997: 362]。し  
たがって、タイ国内の中でもタイ北西部が、遺骨収集の重要拠点であったことは明らかであ  
る。タイにおける遺骨収集は、1977 年度から 2004 年度の間に 12 回行なわれており、合計  
1,980 柱を収容している。<sup>15)</sup>

遺骨収集と同時並行で、慰霊碑の建立も進められてきた。現在までに、小規模「戦没日本人  
之碑」が 21 基 [厚生省 1997: 373-374, 514-515]、戦没者慰霊碑が 15 基、ソ連抑留中死亡者  
の小規模慰霊碑が 16 基建立されている。<sup>16)</sup> しかし、タイ国内には、日本政府により建てられた  
慰霊碑は存在しない。

最後に、慰霊巡拝について言及する。これは、「戦没者の遺骨を完全に収集することは事実  
上困難であることから、それを補うべく精神的慰藉事業として政府が行なっているもの」 [厚  
生省 1997: 295] で、1976 年に開始された [厚生省 1997: 369]。しかし、タイで慰霊巡拝が  
行なわれたことはない。<sup>17)</sup> 一方後に始まった戦没者遺児中心の慰霊巡拝 [厚生省 1997: 372-  
373] については、1993 年度を第 1 回とし、近年では 2018 年度より隔年で実施されている。<sup>18)</sup>

## (2) 民間レベルでの慰霊活動

一方で、タイでは個人・民間レベルの慰霊活動も戦後断続的に行なわれてきた。

まず遺骨収集について言及する。タイ北部における遺骨収集の尽力者の 1 人は、藤田松吉  
である。彼はインパール作戦に従軍し、作戦失敗後にタイに敗走してきた兵の 1 人であり、  
その後タイに永住した。戦後 10 年が経った後、遺骨収集を始めた [三留 1988: 55-68]。政府  
主導の遺骨収集に現地調査も含めて協力し、また自ら収集した遺骨を政府の遺骨受領団に渡し  
ていた [全ビルマ戦友団体連絡協議会 1980: 423-425, 503-504; 木村 2000: 12; 厚生省 1997:

15) 厚生労働省ホームページ「令和 6 年度第 2 回戦没者の遺骨収集に関する有識者会議資料」〈[https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage\\_53173.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_53173.html)〉(2025/6/26 最終閲覧)のうち、「資料 2：戦没者の遺骨収集事業の取組状況について」による。

16) 厚生労働省ホームページ「戦没者慰霊事業の実施（式典、遺骨収集等）」〈<https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hokabunya/senbotsusha/seido01/index.html>〉(2025/1/16 最終閲覧)による。

17) 厚生省 [1997: 369-370] および、厚生労働省ホームページ「白書、年次報告書」〈[https://www.mhlw.go.jp/toukei\\_hakusho/hakusho/](https://www.mhlw.go.jp/toukei_hakusho/hakusho/)〉(2025/1/16 最終閲覧)のうち、平成 19 年版以降の「厚生労働白書（資料編）—社会福祉・援護—慰霊事業」による。1997 年および 1998 年については、「等」とまとめられたうちにタイが含まれている可能性はある。

18) 正式には「慰霊友好親善事業」と呼ばれている。これ以前の慰霊巡拝は、戦没者の妻や父母、兄弟の参加が優先されてきた。慰霊事業がタイで実施される場合は大抵、ミャンマーとセットの旅程になる。1993 年には厚生省 [1997: 373]、近年の実施状況については厚生労働省ホームページ「報道発表資料」〈<https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/index.html>〉(2025/1/16 最終閲覧)のうち、「戦没者慰霊事業の実施状況—戦没者遺児による慰霊友好親善事業」による。

363]. 合計 800 柱を収集し、ランブーン県の自宅の庭の一角に建立した慰霊碑 [三留 1988: 68] に納めていたが、現在はすでに日本に送還されているという。2 人目は、調寛雅である。彼は、佐賀県にある因通寺の第 16 世住職であった。1990 年より遺骨収集を始め、収集された遺骨は 18,000 柱にのぼる。遺骨は、チェンマイ県にあるバーンカートウィタヤーコム校内に建てられた追悼之碑 (1993 年) の中に納められた。<sup>19)</sup>

次に、慰霊事業について言及する。タイにおける慰霊巡拝を語るうえで欠かせない人物は、永瀬隆である。彼は陸軍の通訳として、1943 年から敗戦までカーンチャナブリーおよびバーンポン (バンポン) で駐勤した。戦後 1964 年から 2009 年までに、135 回にわたってタイ全国各地を巡礼した。<sup>20)</sup> 慰霊祭に関しては、現在もチェンマイ県やカーンチャナブリー県において毎年行なわれている。<sup>21)</sup> また、現在まで続いてはいないものの、戦後定期的に慰霊祭が行なわれていた事例はある。たとえばナコンナーヨック県において、1982 年を第 1 回とし、1989 年の慰霊碑建立以降はほぼ毎年第 37 師団出身の元日本兵による慰霊巡拝・慰霊祭が行なわれていた [藤田 2001: 151-161]。

最後に、慰霊碑建立について言及する。遺骨収集や慰霊事業とは異なり、日本政府による慰霊碑の建立はタイでは行なわれなかったが、民間レベルの慰霊碑は多々存在する。ここではとくに、調査地であるタイ北西部メーホンソーン県内の慰霊碑について言及する。まず、ムアン・メーホンソーン郡内のプラノーン寺院には 2 つの慰霊碑が存在する。ひとつは 1989 年に山口県出身の有志により、もうひとつはビルマにて戦死した兄のために 2004 年に妹が建てたものである。また、ムアン・メーホンソーン郡内ファイポーン村の国道沿いには、日本式の慰霊碑とタイ式のバゴダの 2 つが並んで建てられている。これは永瀬により 2000 年に建てられたもので、この辺りからは多くの遺骨が見つかったといわれている [満田 2011: 134]。そして、ミュージアムがあるクンユアム郡にはより多くの慰霊碑が存在する。1995 年に 3 基、1998 年に 1 基、2000 年に 1 基、2011 年に 1 基が建立されている。

総括すると、メーホンソーン県内の慰霊碑は 1980 年代末以降、とくに 1990 年代に集中して建てられているのである。つまり、タイ国内において戦後断続的に行なわれてきた日本人による慰霊活動が、メーホンソーン県内で活発に行なわれるようになったのが 1990 年代だった。それは同時に、タイ国内でコミュニティミュージアムが次々と建立された時期であり、クンユ

19) NPO 慧燈ホームページ「NPO 慧燈の沿革」〈<http://ww7.tiki.ne.jp/~intuji/ensen.html>〉(2025/1/16 最終閲覧) による。

20) 映画「クワイ河に虹をかけた男」オフィシャルサイト「永瀬さん年表」〈[https://www.ksb.co.jp/kuwaigawa\\_movie/](https://www.ksb.co.jp/kuwaigawa_movie/)〉(2025/1/16 最終閲覧) による。泰緬鉄道建設に従事した元捕虜への贖罪と和解のために尽力した人物としても有名である。

21) 前者はチェンマイ戦没者慰霊祭ホームページ〈<https://chiangmai-memorial.jimdofree.com/>〉(2025/1/16 最終閲覧)、後者はタイ国日本人会ホームページ〈<https://jat.or.th/jp/>〉(2025/1/16 最終閲覧) による。

アムもその例外ではなかった。別々の文脈で誕生した2つの事象は、ここクンユアムの土地で結実し、戦時の地域住民と日本兵との関係を主要テーマとするコミュニティミュージアムが誕生したのである。

## 4. 創られる地域史

### 4.1 ミュージアムの沿革

#### (1) 日本兵の遺留品を扱うミュージアム

ミュージアムは、1996年11月9日に「第二次世界大戦博物館」という名前で開館した。開館にあたって重要な働きをした人物として、チューチャイ・チョムタワットという警察官がいる。彼は前年の1995年にクンユアム郡の警察署に赴任してきて、各村への定期的な見回りの際に、多くの村人の家に日本兵の遺留品があることを知った。元々古いモノが好きだった彼は、それらを収集し始めた。その後1996年に郡によって「クンユアム郡文化センター」が建設されるも、展示するものが見つからないという相談を受けた。そこで、建物の一部を使って自らの収集品を展示することを提案したのだ。戦時中に関する記録が少ない中、日本兵の遺留品を公共のモノとすることで、将来の世代が歴史を学ぶ場を提供できると考えたためである。また、クンユアムの観光業や経済の活性化、警察の広報活動の推進等への期待もあった。彼は同時に、ミュージアムの運営も任された。地域住民のミュージアムへの理解が深まると、モノを寄付する者も現れ、設立過程における展示品数は600点ほどだった [Chuchai 2012: 29-33]。

#### (2) 慰霊の場としてのミュージアム

前節でも述べたとおり、クンユアムには1995年に3基、1998年に1基、2000年に1基、2011年に1基<sup>22)</sup>の慰霊碑が建立されている。このことから、ミュージアムが開館した1996年前後に集中して建てられていることが分かる。まずは開館前の1995年に建てられた慰霊碑について検討していく。

3基のうち2基は、ミュージアムと道路を挟んでほぼ真向いにあるムアイトー寺院内にある。1つ目の慰霊碑の表部分には、「ビルマ戦線将兵鎮魂之碑 平成七年十一月吉日建立」とあり、裏には詩とともに埼玉県のある有志「南風会」の名が刻まれている。2つ目の慰霊碑の表部分には、「日本軍将兵遺骨埋葬の地」とあり、裏には「多くの日本兵がこの寺院で世話になった」と刻まれている。<sup>23)</sup> 建立者のひとりである井上朝義は、ビルマ戦線に従軍し、チェンマイへの撤退

22) 本稿では扱いきれないが、東京都日蓮宗本照寺住職の境野哲秀により建立された。慰霊碑の上部にはワシをモチーフにした石像があり、下部表面には「Rest in Peace」の言葉と、境野による絵が彫られている。

23) 慰霊碑に建立年は刻まれていないが、建立者のひとりである井上の著書に、元々あった木碑を、1995年に現在の石碑に建て替えたとある [井上 2009: 64]。

途中にクンユアムを通過した兵士のひとりである [井上 1988]。3 基目は、同郡内のトーペー寺院にある。現在までに何度か建て替えられているため建立当時のものはないが、当時は表面に「タイ・ビルマ方面戦病死者追悼之碑」、側面に「平成七年一月二十七日建立」と書かれた慰霊碑であった。

開館後の 1998 年頃には、井上を発起人としてミュージアム前の広場に「戦友よ安らかに眠れ」と刻まれた慰霊碑が建てられた。<sup>24)</sup> 2000 年には永瀬により、ムアイトー寺院内に慰霊碑 1 基と「クンユアム星露院」と名付けられた念仏堂が建てられた。碑には、戦記作家の伊藤桂一が永瀬に贈った詩が刻まれている [満田 2011: 137]。

慰霊碑の建立だけでなく、井上と永瀬はそれぞれチューチャイ氏と直接会っており [井上 2009; 満田 2011]、また井上は戦時中に自らが撮影した多くの写真をミュージアムに提供するなど、ミュージアムへの関与が認められる。

一方、ミュージアム設立のニュースが日本に伝わると、戦時中この地に滞在していた元日本兵たちが毎年訪れるようになった。彼らの中からミュージアムに対して経済的支援を行なう者や、展示物を寄贈する者が出てきた結果、1998 年末には展示物の数は 1,000 点にまでのぼった [Chuchai 2012: 33-34]。すると、彼らの想いがミュージアムの展示に反映されるようになる。祭壇や「鎮魂」と書き込まれた日本国旗 [早瀬 2007: 103]、昭和天皇のご真影、開戦時の詔勅、焼香台等が設けられた慰霊の部屋 [武田 2008: 117] があったことが確認されている。

総括すると、慰霊碑の建立や元日本兵の訪問が、日本兵の遺留品を集めただけのミュージアムに、慰霊の場としての機能をもたせるようになったのである。

### (3) 地域のミュージアムへ

ミュージアムが日本人の間で注目を浴びようになるにつれて、タイの行政や自治体も第二次世界大戦時この地に日本兵が駐屯していたという歴史的事実に注目するようになった。

その端緒は、ムアイトー寺院内に建てられた日本兵の像と小さなギャラリーである。住民への聞き取りによると、日本兵の像は観光目的でムアン・メーホンソーン郡の政治家のひとりが発案し、2006 年頃に設置されたのだという。「日本兵の行軍」「日本軍の敗戦」「クンユアムの人々と日本兵の関係」とそれぞれ題された作品が 3 つある。一方ギャラリーの中には、絵画が展示されている。日本兵に関するものの中には、現地女性との恋物語を題材とした絵がある。そのほかには、プーミボン国王・シリキット王妃・シリントーン王女の訪問や観光名物であるプアトーン（和名ニトベギク）の花の絵なども一緒に飾られている。2006 年頃はすでにミュージアム開館から 10 年が経っており、ミュージアムの内容を受けて、戦時の地域住民と日本兵との関係を扱ったモノが作られていることが分かる。しかしそれに加えて、地域を代表

24) 慰霊碑に建立年は刻まれていないが、井上の著書に 1998 年に書かれた概文の引用 [井上 2009: 64-66] があったため、「1998 年頃建立」と判断した。

するほかの要素も一緒に展示することで、町を活性化させようという意図が見て取れる。

また、重要な出来事として、Little Japan Project の立案とそれに対する地域住民の抗議運動がある。このプロジェクトは、2008 年にクンユーム自治体（テーサバーン）とそのほか関係者により立案された。ミュージアムを活性化させるとともに、リタイアした日本人のための日本人町を作るという計画である。

2000 年代以降、タイではロングステイヤーの誘致促進のため、年金ビザおよびロングステイビザ導入等の優遇政策が進められてきた。これはタイ観光局が中心となって行なった観光政策の一環であり、長期滞在者の増加による外貨獲得を意図したものであった [伊藤 2010: 4, 5, 8; ドゥアンケーオ 2017: 52]。また 2007 年には、チェンマイ商工会議所主催で、地域経済の活性化を目的とした、日本人中高年向けのロングステイ事業計画に関するセミナーが実施されている [河原 2010: 46]。

2008 年にクンユームで立案された Little Japan Project も、上記のような国内状況を十分反映していると考えられる。これに対し、2009 年以降住民側から反対の声が上がった。その結果、このプロジェクトは構想段階で頓挫した [Tiamsoon 2015: 33]。

この一連の出来事は、ミュージアムのあり方に少なからず影響を及ぼしたと考えられる。それは、抗議運動の中心人物がミュージアムについて述べた主張から推測できる。<sup>25)</sup> 彼は、署名の収集、抗議文の提出、デモ行進などの抗議運動を展開した。彼のミュージアムに対する主張の 1 つ目は、館名についてである。彼としては、“Living Museum” という名前にしたかったと述べる。主張の 2 つ目は展示内容についてであり、過去の出来事よりも現在の自分たち、つまり失われつつある地域文化についての展示を増やすべきだとする。次にみるように、彼の主張と現在のミュージアムには、共通した方向性が認められる。

ミュージアムの管理は、2007 年にチューチャイ氏からクンユーム郡に移管された。さらに、メーホンソーン県から観光開発費 2 千万バーツの予算が下り、2012 年に建て替えられた [CHAO 2012: 2]。これにより、外装および展示内容は劇的な変化を遂げた。外装は、以前の赤い屋根の建物から一転して、グレーを基調とした、タイヤイ様式を取り入れた現代的な建築デザインとなった。内容に関しては、以前の漠然とした展示と比べると、説明パネルが追加されたことなどにより洗練されたものとなったという [CHAO 2012: 2]。

リニューアル以前と以後の展示内容を改めて比較することで、現在の展示の特徴を以下に 2 つ挙げる。

1 つ目は、前項で示した「慰霊の場」が消失していることである。開戦時の詔勅は現在も展示されているが、それ以外の慰霊空間を定義づける祭壇や焼香台等は存在しない。昭和天皇の

---

25) 抗議運動の中心人物である 60 代男性からの聞き取りによる（2023 年 2 月 20 日）。現在は定年退職しているが、長らく教育に携わってきた人物である。年齢から明らかなように、戦争を経験していない世代である。

ご真影もない。このことから、当館における元日本兵を含む日本人の影響力が下がったことが読み取れる。

一方で、展示における地域住民の存在感は強くなった。特徴の2つ目は、地域アイデンティティの顕示である。大雑把ではあるものの、町の成り立ちから順に地域史を追うかたちの展示形態となっており、また地域文化に関する展示スペースも存在する。すなわち、もはや戦時の日本兵との関係に終始したミュージアムではなくなったことが指摘できる。しかし全体として、「タイ日友好」という館名や、日本兵の遺留品が総展示品数に占める割合からは、依然として第二次世界大戦が主要なテーマであることは否定できない。

以上のように、日本兵の遺留品を集めたミュージアムから、慰霊の場としてのミュージアム、当該地域のアイデンティティを追求する施設へと、ミュージアムの性格は変化してきた。しかしそれはミュージアムの中だけで起こったものではない。1990年代末の元日本兵の同地への訪問および慰霊碑建立や、2000年代の地域おこしをめぐる一連の出来事と深く関連づけられるがために、本館はこの町の歴史をも体现しているのである。

#### 4.2 日本兵語りと地域史

以上の考察を踏まえたうえで、日本兵語りが当該地域の地域史の一部として取り込まれる過程を検討し、地域史創造の一端を示すこととする。その過程は、大きく4つの段階に分けられる。

まず、第二次世界大戦時にビルマへの道路建設およびビルマからの撤退の際に日本兵が同地を訪れ、地域住民との間に一時的であれ交流があったという事実が存在する。その事実自体は、双方の個人的記憶の中にとどまるものであった。

次の段階は、戦後同地を訪れた日本人と地域住民との再会である。アルヴァックスは、記憶が維持されるためには、個人の記憶と他人の記憶との間に共通点が十分存在し、喚起される思い出が共通の基盤の上に築かれなければならないとしている [アルヴァックス 1989: 16-17]。個人的記憶は集合的に再生産されることによって、維持されるのである。慰霊のために訪れた日本人と地域住民とが1990年代に出会うことがなければ、戦時の両者の交流という記憶・思い出は個人の記憶としてとどまり、そのまま忘却される可能性は十分にあった。しかし、慰霊活動を通して両者が再会したことにより、戦時の記憶は両者共通の記憶として再生産されたと考えられる。

再生産された記憶は、同時期の国内におけるコミュニティミュージアム建設の流行と接合することにより、ミュージアムの主要テーマとなった。主要テーマとなった理由については、もちろんチューチャイ氏個人によるところも大きい。しかし、元日本兵たちが訪問・モノの寄贈・経済的支援を行なう中で、ミュージアムに慰霊の場としての機能を見出していったことは決定的であったといえる。町の中心にあるミュージアムで戦時の日本兵との関係が語られるよ

うになったということは、地域で起きた出来事のひとつとして広く認識されるようになることを意味している。その後、ミュージアム周辺にタイ人によって日本兵を題材とした像やギャラリーが設置されたことから明らかである。これが第3段階である。

最終段階として現在のミュージアムの展示内容は、戦時の日本兵との出来事を、地域史の中で提示している。そのようになった背景のひとつとして、Little Japan Project の立案とそれに対する地域住民の抗議活動について提示した。これは、日本兵の遺留品を展示するミュージアムの活性化と日本人町の建設という、いずれも地域を代表するものを、地域住民自身ではなく、外部者である日本人に設定した案だった。さらに、地域の記憶・歴史を、地域活性化を目的とした観光産業の資源として利用するものでもあった。この計画に対する抗議運動は、地域住民の地域アイデンティティの自覚と主張を意味するとともに、地域史をいかに扱うかという問題に対する地域住民自身の姿勢が表れているといえる。これらを体現した施設が現在のミュージアムであるとするならば、そこで提示されている日本兵語りは最終的に地域史の一部としての地位を得たと考えられるのである。

## 5. お わ り に

本稿は、タイにおける地域史の位置づけを再検討することを目的とし、具体的にはタイ北西部メーホンソーン県クンユーム郡における地域史創造の過程を明らかにした。

本稿で扱った地域史創造の過程は、次の3つの文脈が折り重なることによって生じたものである。すなわち、コミュニティミュージアム建設の流行という国内の文脈と、戦後の日本人による慰霊活動という国外の文脈、さらに地域住民の応答としての地域アイデンティティの主張が加わることで、現在のかたちになったといえる。とくにコミュニティミュージアムは、タイ社会への現状批判による「コミュニティ文化」への関心の高まり、その後の法制度への組み込みや、中間層によるノスタルジアや「タイらしさ」の再発見などの社会文化的な背景を経て、展開してきた。したがって、コミュニティミュージアムは地域アイデンティティを重視し体現する場所でありながらも、同時にタイ国民文化・国史への事例提供としての側面も拭ききれない場所であるといえる。<sup>26)</sup>

しかし、本稿の事例は、コミュニティミュージアムの文脈のみでは十分に説明できない。なぜなら、日本人の慰霊活動という全く関係のない文脈が接合したうえに、さらにそれに対抗するかたちで地域アイデンティティが活性化された側面があるからである。後者の地域アイデンティティの芽生えは、国家イデオロギーへの対抗などそもそも問題とはなっていない点におい

---

26) タイのナショナリズムを支える保守イデオロギーの存続・再生産に中産階級が果たしてきた役割を検討したサーイチョンは、過去に対するノスタルジアが保守イデオロギーの強化を促したことを指摘している [Saichol 2023]。

て、まさに国家イデオロギーとは別の文脈で本事例の地域史創造過程を説明できるのである。

では、そもそも国家イデオロギーに回収されない地域史の検討は何を意味するのか。トンチャイは、タイ史のマスタープロットである、繰り返される独立維持のための奮闘物語は、もはやタイの記憶を独占しないとする [Thongchai 1995: 119]。そして、これまでナショナルヒストリーによって抑圧され、置き換えられてきた多くのほかの歴史を見出すべきだという [Thongchai 2003: 11]。地域史の再発見や再構築に関する検討は、ナショナルヒストリーとローカルヒストリーとの関係を見直す試みであり、本稿もその目的をもったものである。

タイ国史では第二次世界大戦期について、「平和宣言史観」が有力であるとされている。ブリディが行なった平和宣言に基づいており、内容としては次のようなものである。タイ国民は平和と中立を望んでいたが、日本に強制されて意に反して日本と同盟させられ、英米に宣戦させられた。タイ国民の真意は抗日救国の自由タイ運動を組織した点に現れている、というものだ [村嶋 1999: 50]。一方で、本稿で扱った日本兵語りは、日本兵に関する否定的な描写が少なかった。また、語りの舞台がタイービルマ国境地域であったこと、地域住民目線の経験が元になっていることなどから、中央とは異なる視点・地域からの歴史といえる。

そしてこの地の日本兵語りは、戦場となったビルマと、日本軍にとってはその足がかりとなったタイとの狭間に位置した国境地域特有の経験から生まれたものであった。つまり、大国の狭間に位置していたがために、当該地域は日本軍の通過地点、とくに撤退路となり、その結果地域住民は多くの日本の敗残兵と出会うことになったのである。本稿は戦争という観点からタイ北西部の地域史を検討したが、これはかつてはランナー世界とシャン世界、現在はタイとミャンマーという2大政体に挟まれた地域特有の経験のひとつとして広く捉えることが可能だ。ニティは、この国境地域がすでに国家に統合されたという分析を行なっているが [Niti 2000, 2006]、今後筆者は、この地を依然として「狭間」<sup>27)</sup>であると捉えることによって、統合されたはずの地域でいかに地域史や地域文化が再発見・再構築されているかを検討していきたい。

## 引用文献

- 浅井得一. 1953. 「泰緬鉄道」『新地理』1(4): 13-19.  
 Charoenpot S. eds. 2008. *44 National Museums of Thailand*. Bangkok: Fine Arts Department.  
 Chatthip Nartsupha. 1991. The Community Culture School of Thought, In Manas Chitakasem and Andrew Turton eds., *Thai Constructions of Knowledge*. London: School of Oriental and African Studies, University of London, pp. 118-141.

27) トンチャイは、ナショナルヒストリーを相対化するために、狭間の歴史を記述することを提案している。狭間の歴史とは、国家である状態とそうでない状態、国家になる状態とならない状態の間の場所や瞬間の歴史である [Thongchai 2003: 11]。

- Chuchai Chomthawat. 2012. *Yonroi khwam songcam thi Khunyuam* [クンユアムの思い出を辿る]. Chiang Mai: Nantakarn Graphic Printing [タイ語文献].
- Connors, Michael Kelly. 2006. Hegemony of the Politics of Culture and Identity in Thailand, *Critical Asian Studies* 37(4): 523–551.
- Duangjai Lortanavanit. 2009. Decentralization, Empowerment and Tourism Development: Pai Town in Mae Hong Son, Thailand, *Southeast Asian Studies* 47(2): 150–179.
- ドゥアンケーオ・スットプラータナー. 2017. 「タイ・チェンマイにおける日本人長期滞在者のライフスタイル型の移動とそのインパクト」 琉球大学大学院人文社会科学研究科博士学位論文.
- 藤田 豊. 2001. 『ナコンナヨークの碑—第三十七師団慰霊碑秘話』 ナコンナヨークの碑・出版会.
- アルヴァックス, M. 1989. 『集合的記憶』 小関藤一郎訳, 行路社.
- Hayami, Yoko. 2006. Redefining “Otherness” from Northern Thailand Introduction: Notes Towards Debating Multiculturalism in Thailand and Beyond, *Southeast Asian Studies* 44(3): 283–294.
- 早瀬晋三. 2007. 『戦争の記憶を歩く—東南アジアのいま』 岩波書店.
- 日向伸介. 2012. 「ラーマ7世王治世期のバンコク国立博物館に関する一考察—ダムロン親王の役割に着目して」『東南アジア—歴史と文化』 41: 30–60.
- 平井京之介. 2007. 「知識のマテリアリティ—北タイのバイラーン製作に関する試論」 伊東道子編 『生態資源と象徴化』 弘文堂, 293–328.
- . 2013. 「タイのコミュニティ博物館についての一考察—博物館か, 寺院か?」『国立民族学博物館研究報告』 37(3): 281–310.
- 市川健二郎. 1987. 『日本占領下タイの抗日運動—自由タイの指導者たち』 勁草書房.
- 井上朝義. 1988. 『彷徨ビルマ戦線』 大村印刷株式会社.
- . 2009. 『続彷徨ビルマ戦線—目で見える日泰友好物語り』 大村印刷株式会社.
- 石井米雄. 1999. 『タイ近世史研究序説』 岩波書店.
- 伊藤 真. 2010. 「海外日本人社会の組織化と分節化—タイ, チェンマイを中心に」『人文学報』 423: 1–19.
- 柿崎一郎. 2016. 『物語 タイの歴史—微笑みの国の真実』 中央公論新社.
- . 2022. 『草の根の日タイ同盟—事件史から見る戦時下の日本人とタイ人』 京都大学学術出版会.
- 河原雅子. 2010. 「タイ・チェンマイにおける日本人ロングステイヤーの適応戦略と現地社会の対応」『年報タイ研究』 10: 35–55.
- 木村 茂. 2000. 「アジア太平洋戦争海外戦没者の遺骨収集事業—その経緯と問題点」『追手門学院大学文学部紀要』 36: 1–18.
- 北原 淳. 1996. 『共同体の思想—村落開発理論の比較社会学』 世界思想社.
- 厚生省社会・援護局援護 50 年史編集委員会 (厚生省). 1997. 『援護 50 年史』 ぎょうせい.
- 松行美帆子・城所哲夫・大西 隆・西浦定継. 2005. 「タイにおける参加型都市・地方発展方策の変遷に関する研究」『都市計画論文集』 40(3): 535–540.
- 三留理男. 1988. 『望郷—皇軍兵士いまだ帰還せず』 東京書籍.
- 満田康弘. 2011. 『クワイ河に虹をかけた男—元陸軍通訳永瀬隆の戦後』 梨の木舎.
- 村嶋英治. 1999. 「タイの歴史記述における記念顕彰本性格—1942–43 年におけるシャン州外征の独立回復救国物語化をめぐる」『上智アジア学』 17: 33–57.
- . 2002. 「タイ国の立憲革命期における文化とナショナリズム」『岩波講座 東南アジア史 第 7 巻』 岩波書店, 241–270.
- 永瀬 隆. 1983. 「泰緬鉄道の建設にかかわった元陸軍通訳」アジアの女たちの会, 8・15 とアジアグループ編 『教科書に書かれなかった戦争』 梨の木舎, 65–82.

- Niti Pawakapan. 2000. Trade and Traders: Local Becomes National, *Journal of Southeast Asian Studies* 31(2): 374–389.
- \_\_\_\_\_. 2006. “Once were Burmese Shans”: Reinventing Ethnic Identity in Northwestern Thailand. In Alexander Horstmann and Reed L. Wadley eds., *Centering the Margin: Agency and Narrative in Southeast Asian Borderlands*. New York: Berghahn Books, pp. 27–52.
- \_\_\_\_\_. 2018. Almost a Love Story: Japanese Soldiers in North West Thailand, *South East Asia Research* 9(2): 149–171.
- Reynolds, C. J. 2002. Introduction: National Identity and Its Defenders. In C. J. Reynolds ed., *National Identity and Its Defenders: Thailand Today*. Chiang Mai: Silkworm Books, pp. 1–32.
- Saichol Sattayanurak. 2023. The Thai Middle Class and the Dynamics and Power of Conservative Ideology in Thai Society and Politics, *Southeast Asian Studies* 12(Supplementary Issue): 43–104.
- 重富真一. 2009. 「タイにおけるコミュニティ主義の展開と普及—1997年憲法での条文化に至るまで」『アジア経済』50(12): 21–54.
- 将口泰浩. 2008. 『未帰還兵—六十二年目の証言』産経新聞出版.
- 須永和博. 2017. 「周縁へのまなざし、周縁からの応答—タイ北部におけるコミュニティ・ベースド・ツーリズム」『Encounters』5: 1–14.
- 武田浩一. 2008. 「『クンユーム旧日本軍博物館』チューチャイ館長来日記」『軍事研究』43(6): 116–117.
- 田辺繁治. 1972a. 「タイ旧制度下の国家領域に関する一考察」『東南アジア研究』10(2): 246–270.
- \_\_\_\_\_. 1972b. 「タイにおける国家領域の成立過程—チャクリ改革期を中心として」『史林』55(6): 739–779.
- 玉田芳史. 1996. 「タイのナショナリズムと国民形成—戦前期ピブーン政権を手がかりとして」『東南アジア研究』34(1): 127–150.
- Tej Bunnag. 1977. *The Provincial Administration of Siam 1892–1915: The Ministry of the Interior under Prince Damrong Rajanubhab*. Oxford University Press.
- Thongchai Winichakul. 1995. The Changing Landscape of the Past: New Histories in Thailand since 1973, *Journal of Southeast Asian Studies* 26(1): 99–120.
- \_\_\_\_\_. 2003. Writing at the Interstices: Southeast Asian Historians and Postnational Histories in Southeast Asia. In Abu Talib Ahmad and Tan Liok Ee eds., *New Terrains in Southeast Asian History*. Athens: Ohio University Press, pp. 3–29.
- Tiamsoon Sirisrisak. 2015. Reconsidering the Interpretation of WWII Shared-heritage in Thailand, *Journal of Cultural Heritage Management and Sustainable Development* 5(1): 30–42.
- トムヤンティ. 1987. 『メナムの残照』西野順治郎訳、大同生命国際文化基金.
- トンチャイ・ウィニツチャクン. 2003. 『地図がつくったタイ—国民国家誕生の歴史』明石書店.
- 山口雅代. 2016. 『戦前・戦中における日本語普及と諜報工作—チェンマイ日本語学校とインパール作戦』大空社.
- 読売新聞社編. 1980. 『昭和史の天皇 9 インパール作戦』.
- 吉川利治. 1992. 『近現代史のなかの日本と東南アジア』東京書籍.
- 全ビルマ戦友団体連絡協議会編. 1980. 『勇士はここに眠れるか—ビルマ・インド・タイ戦没者遺骨収集の記録』全ビルマ戦友団体連絡協議会.

## 雑誌

CHAO (ちゃ〜お). 2012 (8月10日). 「クンユームにきた日本兵とタイ日友好記念館」.